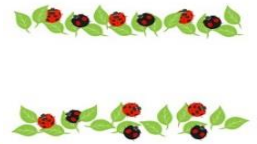


教育センター研修だより



南砺市教育センター

学校司書研修会

下記のとおり、市内学校司書助手を対象に学校司書研修会を実施しました。

1 日時	平成30年5月8日（火） 14：30～16：00
2 会場	井波庁舎 3階 301号室
3 講師	富山市学校司書 佐藤 千雅子 先生
4 参加者	市内学校司書助手 9名
5 内容	子供たちの読書活動を推進する学校図書館の充実に向けて



以前、佐藤先生が速星中学校に勤務しておられたとき、生徒の本の貸し出しが、当初年間約700冊だったのが、8年後には10倍以上の約8000冊にまで増えたそうです。研修会ではその秘密を探ろうと、図書司書助手の方々は、興味津々に話を聞いておられました。

本の貸し出しが、700冊から8000冊に増えた理由は何か。

結論として、佐藤先生は次の二つを言われました。

A：当たり前のことを、当たり前に行う。

B：学校司書の姿勢として、子供を大切に思う心をもつ。

【佐藤先生のされた業務】

- (1) 図書館環境の整備
 - ①払い出し ②書架の配置替え ③分類排架
- (2) オリエンテーション
- (3) レファレンス
- (4) 授業支援
 - ①学校図書館内で行う授業支援
 - ②教室へ出向いての授業支援
- (5) 資料の収集と整理



上記の中で、幾つか佐藤先生の話を紹介します。

【(1) ①払い出しについて】

- ・子供にとって必要でないと思われる本は、廃棄する。学校図書館に必要な本は、「**子供にとって価値のあるもの**」「**最新の情報があるもの**」である。それを見定めつつ、廃棄基準ののっとり、廃棄する。

【(1) ②書架の配置替えについて】

- 図書室の入り口に入ったら、**視界が開ける**ようにする。
- 配置は、**利用者目線**で行うことを常に意識する。本棚にある本の位置が子供の目より高いと、子供がその本を見ることができない。
- 本棚と本棚の幅も考慮する。例えば、一人がしゃがんで本を読み、同時に一人が歩いて本を探すことができるような幅が大切である。
- **管理者目線**も必要で、管理者から子供が見えないような図書室のレイアウトを避ける。

【(1) ③分類排架について】

- 「配架」でなく、「**排架**」という字にこだわっている。「配」はただ本を並べるということに対して、「排」は順序よく並べることである。「排架」の精神で活動したい。
- **子供が読む本は修理**する。読まない本は、修理しても結局読まれない。

【(2) オリエンテーションについて】

- オリエンテーション時の服装は、スーツで行う。それは、**子供との真剣勝負の場**だからである。

【教職員も学べる佐藤先生の心構え】

- 佐藤先生の仕事に対する心構えは、教職員の心構えと同じだと思いました。「子供の立場になって考える」「子供を育てる」ことを何度も言われ、学校業務に携わる者にとって、忘れてはいけないことだと肝に命じたいと思います。
- 「オリエンテーションは真剣勝負の場である」という佐藤先生の信念は、教師の授業に対する心構えにも通じます。佐藤先生の言葉を聞いて、以前、「授業は真剣勝負なんだ」と言われた先輩教師の言葉が浮かんできました。
- 「排架」という字に対するこだわりが、佐藤先生の実践を支える一つの柱だと感じました。実践を支える自分の柱をもつことの大切を学びました。

【ご参加いただいた方々の感想】

佐藤先生のお話の一つ一つが胸にささりました。自分の中では、司書の仕事はできていると満足していたのが、恥ずかしく思いました。

まず、一番に子供のことを考えて動かれているのが、熱く伝わりました。佐藤先生のその姿勢が、子供や先生方に伝わっています。

これから、本が生きている、図書室が生きている現場づくりをしたいと思えます。



能動的に活動されておられることに、感心しました。佐藤先生は「排架」ですが、私は「配架」でした。「払い出し」「排架」の方法を参考にして、自分なりに学校図書業務に積極的に取り組んでいきたいと思えます。